

学	校	を
支	え	る
地	域	の

力

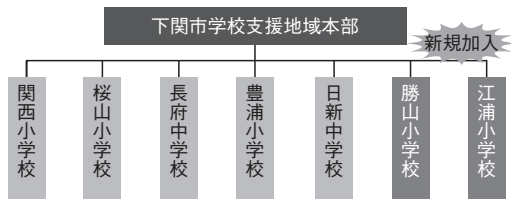
chikara

文部科学省
生涯学習政策局社会教育課

はじめに

下関市は本州の最西端に位置する、三方を海で囲まれた人口約28万人の市です。古くから九州やアジアへの玄関口として栄え、歴史の表舞台に何度も登場しています。平成17年に中核市となり、これからさらに発展しようとして盛り上がっているところです。

図1 下関市学校支援地域本部組織図



学校支援地域本部事業には、平成20年度から取り組んでおり、初年度は3つの中学校区に地域本部を設けていました。今年度、新たに2つの小学校が加入したこともあり、

「つなぐ」「そして」「ひろげる」「取組へ

山口県下関市教育委員会

本部を1つに統合して、下関市学校支援地域本部として再スタートしました(図1)。

実行委員会の構成メンバーは、社会教育委員、婦人会役員、学識経験者、PTA会長、各校の学校長と、教育委員会に構成されています。所管課の生涯学習課だけでなく、学校教育課も参加し、スムーズな連携体制がとれるよう構成されています。

見えてきた方向性

委託2年目の今年度は、昨年度の課題から、事務局として次の3つを柱に取り組んできました。

- ① 1本部の良さを活かす
 - ② 活発な情報交換
 - ③ 自立に向けての準備
- 以下、具体的に述べてみます。

① 1本部の良さを活かす
「はじめに」でも述べましたが、本年度より1本部7校の体制で実施しています。利点としては「事務手続きの簡略化」と「実態に合わせた事業展

開」が可能になったことです。実行委員会(兼地域本部)

で一括して事務を行うことから、その動きはともスムーズです。また、今まで以上に各学校の実態に応じて取り組めるようになり、活動

内容がさらに多様化してきました。

例えば、同じ図書ボランティアでも、ある学校では読み聞かせ中心の活動に、またある学校では図書整備を中心にと、各学校の実態に合わせて支援を行っています。さらに、取組の内容も、学習支援に力を入れる学校、環境整備に力を入れる学校、地域の方と「協働」をキーワードに展開する学校

など、それぞれ独自の学校らしさがあります。現場の声を聞くと、2年次は自由度



読み聞かせの会による発表会



図書室の整備をしているボランティアスタッフ

が増したということです。これまでも、特に制限があったわけではありませんが、1年目の取組でつかんだ実態II学校のニーズを、より踏まえて取り組めるようになったというふうに解釈すべきかもしれません。いずれにしても、本来の事業のねらいに近いことであることは事務局としても喜ばしいことです。

② 活発な情報交換
新しい体制になって良いことばかりではありませんでした。逆にそれぞれ



互いに課題を出し合い、
共感し合うコーディネーターの皆さん

の学校やコーディネーターが、孤立して情報不足になる可能性も高くなりました。そこで学校やコーディネーター同士の連携を保つためにも、年3回の実行委員会の充実と、市独自のコーディネーター研修会を実施することにしました。

年3回の実行委員会では、必ず各校の取組について報告してもらっています。他校の取組に、大きなヒントがあることは多いようで、熱心に耳を傾ける校長先生たちを見ていると、「前向きなリーダーこそ、この事業の推進力」という実行委員長の言葉を思い出しました。

市独自のコーディネーター研修会は、今年初めての取組でした。すでに県で行われている研修会もあり、目的をはっきりとさせる意味から、企画するにあたって特に配慮したのは、講師

は実務経験者とし、参加者をコーディネーターに限定したことです。研修会の中身も、それぞれが直面している課題を出し合い、そこから講師の先生のアドバイスをもらいながらの課題解決型ワークショップ形式にしました。参加者からは、「受け身ではなく自分たちで解決していく実践的な研修になった」「内容もさることながら、ワークショップをとおしてネットワークができた」「同じ目的を持った少人数制だったのでピントを絞って話せた」など、たいへん好評でした。

この取組は、コーディネーターによるところが大きいだけに、今後もコーディネーターの資質能力の向上に向けた支援を続けていきたいと思っています。

③自立に向けての準備

下関市内には23の中学校と、53の小学校があります。その規模から見ると、2つの中学校と5つの小学校でのこの取組は、まだ広く認知されているとは言えません。そこで市の幼・小・中合同で行われるPTA研修会で、今年度の成果報告を行うことにしました。各校の管理職とPTA役員が約300名も集まる会です。対象者といい、規模といい、取組の広報には絶好の機会であると思います。その結果については、この原稿の締

め切りに間に合いませんが、おそらく参加した多くの皆さんが、関心を持ち、自分たちの地域・学校でもすすんで取り組んでいこうというきっかけになると信じています。

気をつけたいのは「良い取組なので同じように進めていきましよう」といっても無理があるということです。まずは「地域で学校を支える」というこの取組のポリシーを多くの人へ広げていきたいと思っています。

今年度の実行委員会の最大の仕事として、「取組の方向性」を提言することがあげられました。第2回実行委員会では、県教委から担当者の参加も得て、示されたたくさんの方の情報をもとに道を探っていきました。以下にそのときの議事録から要点をのせます。

・取組を継続していききたい

・取組の良さを内外に示す
・市独自の取組の研究をする
全体として事業を残すことよりも、そこで取り組んだことを残していく。下関のオリジナルを作り上げていこうという熱意を感じ、身の引き締まる思いです。

今後の課題

これまで、事務局として、できることは何かを考えながらやってきました。具体的には、「つなぐ」こと、「ひろげる」ことです。事業実施の有無にかかわらず、学校同士をつなぎ、そしてひろげることやコーディネーターのネットワークを作る機会を設けることをとおして、今後も各学校の取組を支援していききたいと思っています。さらに情報を精選し、価値ある情報にまとめて、積極的に配信していくことが求められています。市内の各学校が、「地域とつながった取組を進めたい」という際の実践例として参考になるよう、学校のさまざまな声を集め、そのニーズをつなぎ、ひろげていきたいと考えます。

今、この取組自体が広がるとともに、私の夢も広がっていくように感じています。

(生涯学習課主査 大田一夫)



バス通学のマナー指導
ボランティアどうしの雑談の中からうまれたアイデア「どうせ帰るのなら、その時にできるかも」と!